

NEWS

全国で最も低い周産期死亡率を実現

赤ちゃんの命を守る三重県の医療連携

妊娠後期に差し掛かる頃から出産直後まで、母子ともに生命に関わる事態が発生しやすい周産期。三重県は、この周産期の赤ちゃんの死亡率が全国で最小となっています。産科婦人科の池田智明教授にその実現に至る取り組みについて聞きました。

周産期死亡率というのはどういうものですか。

妊娠6か月半頃となる22週目以降から出産後7日未満までの期間は母子の生命に関わる事態が起こりやすく、特に周産期と呼ばれます。周産期死亡率は、周産期の死産と新生児死亡が出生数1000のうちどれだけあったかを示す値で、その地域の周産期医療のレベルを反映しています。

2019年、三重県の周産期死亡率が2.0と全国で最も低くなりました。全国平均3.4に比べてもかなり低水準です。

実は、2016年は5.7と全国で最も悪かったのです。県内の周産期医療の体制整備において、三重大学病院ができることは何か、私自身も2011年に当院に赴任して以降、この思いで人づくりや体制づくりを進めていました。10年かかる大仕事と考えていましたが、2016年の数字を見て非常な危機感を持ちました。全国で最もお産が安全に行われる県を目指して改めて問題点を洗い出し、緊急対策を立てて各地の産科にご協力いただきながら進めました。結果的に2019年、目標としていた全国最低レベルまで持ってくることができました。

3年で順位が大逆転するほどの改善は、どのように実現されたのでしょうか。

人づくりなどそれまで取り組んでいたことがやっと実を結び始めていたというのがありますが、2016年からの3年間は医療機関のすみわけを集中的に行いました。

リスクの高い妊娠、分娩は設備が整った周産期母子医療センターで扱われなければなりません。しかしながら、県内では、クリニックでもハイリスクなお産を受け入れていたり、高度な医療提供が可能な二次、三次施設でローリスクなお産を受け入れて、本来の機能が発揮できないこともあったりと、リスクに応じた医療機関のすみわけやリソースの適正活用が十分ではありませんでした。それぞれの医療機関の役割を明確にし、リスクの高い症例があれば、二次、三次の医療機関とスムーズに連携できるよう、県内の産婦人科医の連携をしっかりとりつつ、周産期リスクの取りこぼしを避ける体制づくりを進めました。

県内の産婦人科医間の連携は強いのですか。

県内5か所の周産期母子医療センターをはじめ、産科がある県内各地の病院には、三重大学病院から医師派遣を行っているので、とても強い連携基盤があります。その連携を周産期医療にいかすため、



リスクのある妊婦さんがあれば、毎朝のテレビ会議にて全員で情報共有する

各地をつないだテレビ会議を毎朝行っています。

この会議は、2012年から行っていましたが、2016年から毎朝にしました。そこで日々各病院が抱える症例と予測できるリスクを共有しておき、いざ何かあっても医療機関間の連携がスムーズに行われるようにしています。医師やスタッフは別々の医療機関にいらながらも、まるで一つのチームとして三重県全体をカバーしているように動いています。このテレビ会議もネットワークも三重県の周産期医療になくってはならないものになっています。

周産期医療のリソースが適切に機能する環境作りが少しずつ行われてきたんですね。

医療機関のすみわけやネットワークづくりだけでなく、2016年以前から県と協力して、三重県内の周産期症例検討会を行ったり、周産期に発生しやすい疾患の早期診断に向けての観察研究も進めてきました。今三重県で年間だいたい14000件のお産が行われています。とにかくその一つひとつのお産が安全に行われるように、当院や県内の産婦人科の医師スタッフができることを続けています。

それら取り組みの中で、最も大変だったのは何ですか。

「人づくり」につきます。ネットワークだけあっても、実際に高度な周産期医療に対応でき、このネットワークの意義を理解し合える人がいなければ連携も協力もありません。産科・婦人科・小児科の全分野の知識に精通し、新たな命が安全に産み出される環境を支えられる人づくりは一朝一夕では無理で、いつも10年先を見て取り組む必要があると思います。

出産・育児に関わる課題は周産期に留まりません。

今、我々が取り組み始めている一つに、障がい児ケアがあります。より手厚い介護を提供できる体制づくりに向けて、三重県や県立こども心身発達医療センターと連携しています。また、少子化対策も大変大事です。直近では、新型コロナウイルスによって約30%以上も分娩数が減少しようとしています。三重大学病院には、「どんな症例でも断らない」、「教え合う」、「逆境に強い」という3つのイムズがあります。全てのお母さんが安心して子どもを授かれるよう、三重大イムズを発揮し、知恵を絞るべきところがまだまだありそうです。

PROFILE | 産科婦人科 科長・教授
池田 智明

趣味はジョギング。ゴルフは三重大医学部ゴルフ部の顧問を務めるほどの腕前とか。産婦人科のやりがいとは、「女性の一生と付き合うことができるライフスパンが最も長い診療科。入院は一人でも、退院のときは赤ちゃんが加わり二人以上になっている、そんな姿に『おめでとう』と言える唯一の科」であること。「女性を幸福にすることが、家庭を幸福にし、そして社会を幸福にする」との思いが産婦人科医としての道しるべ。



妊婦さんは、新型コロナウイルス感染症の重症化リスクが高いのですか？

これまでの症例から見ると、妊婦さんの方が無症状である場合が多い可能性があります。一方で、妊婦さんは、妊娠されていない方に比べて入院、集中治療室(ICU)への入院、人工呼吸器を使用した治療の割合が高いこともわかっており、「妊婦さんに重症化リスクがないとは言えない」というのが研究者の現在の見解となっています。ただし、死亡リスクが相対的に高いというデータはいまのところありません。

新型コロナウイルス感染症にいろいろな治療薬が使われています。妊婦さんにも使用可能ですか？

新型コロナウイルス感染症の治療薬の一つとして、インフルエンザ治療薬であるアビガン(ファビピラビル)が検討されることがあります。この薬は催奇形性があるため、妊婦さんに加え、これから妊娠しようとする方も服用には注意が必要です。それ以外の治療薬は妊婦さんでも使用できます。かかりつけ医と十分相談しましょう。

妊婦さんが新型コロナウイルス感染症に似た症状を感じたときは、どうしたらいいのでしょうか？

妊婦さんが感染した場合、多くの場合で発熱の症状が見られることが報告されています。また、咳、筋肉痛、悪寒、頭痛、味覚・臭覚の消失など、一般的な感染者と同様の症状があり、特に妊婦さんに限った症状というものはありません。

こうした症状を感じた場合、新型コロナウイルスが疑われますが、妊婦さんの場合には、同時にインフルエンザ、A群溶連菌感染症、尿路感染症や子宮内感染症を疑うことも重要ですので、かかりつけ医に相談してください。一般の患者さんとは別の空間・時間での診察をしていただけると思いますし、必要に応じて発熱外来や専門内科を紹介していただけるはずです。こうした場合にも備えて、日ごろから産婦人科のかかりつけ医を持たれることをお勧めします。

新型コロナウイルス感染症 妊婦さんのリスクや注意点

産科婦人科 科長・教授 池田 智明

2020年10月の日本臨床ウイルス学会でも『妊娠とCovid-19』のテーマで発表。世界の症例を基に、新型コロナウイルスにおける妊婦さんと赤ちゃんのリスクについて研究を進めている。



三重大学病院でのお産はどうなっていますか？

現在、三重大学病院では、感染防止の立場から出産のご家族立ち合いや面会のご遠慮いただいております。

妊婦さんにはいろいろなご不安があると思いますが、医師、助産師、看護師が出来る限りサポートさせていただきます。何か心配事があれば、スタッフに遠慮なくお声がけください。



お母さんが感染した場合、おなかの中の赤ちゃんにも感染することがあるのでしょうか？

妊婦さんが新型コロナウイルスに感染し、胎盤を通じておなかの中の赤ちゃんにも感染するのは皆無とはいきませんが、きわめてまれなケースと考えられます。よって万が一、妊娠中に感染した場合も不安を持ちすぎることなく、過ごしていただきたいと思います。不安があるときは、かかりつけ医に遠慮なく相談してみましよう。

ただし、授乳中に感染した場合には、母乳をやめ、人工栄養に切り替え、接触をできるだけ避けていただくことが必要です。



新型コロナウイルス感染を避けるため妊婦さんへのアドバイスはありますか？

一般の方と同じですが、マスク着用、3密を避ける、不要な外出を避けるなどを行っていただくとよいでしょう。三重県の産婦人科診療は、唾液PCRなど十分に対応しておりますので、不当に怖がることなく、安心して赤ちゃんをお産みください。

